



CPI Mates

NO.57

2002. 12. 15

The Committee for Promotion to Innovate Japanese People by Educational and Cultural Contact, since 1979

目 次

巻頭のよびかけ（会長 小西菊文） 「学校の総合学習・授業体験から」	P 2
里親との交流のしかたを改善していきます 里親—里子新聞への期待 スタディツアー部会の発足	P 3
スリランカの国勢調査等からみた教育事情 子どもたちの教育を社会が支えられる？ 民衆の生活についての聞き取り調査から	P 4
インドネシア教育里子との対話会からQ&A PPKIJ—C.P.I.の奨学システムの特徴は？ 日本語の先生のためのコースが欲しいの声があるが？ 私立大学に入った者の奨学を考えることができるか？ 卒業生が参加できる地域開発プロジェクトについて？ 教育開発基金でどんなことをしていますか？	P 5—P 6
2002年度第2回評議員会検討録 地域会代表の、奨学生認証式への参加を検討 SNECCからの、2件の要請を検討 地域会を主体とした来期スリランカでの交流を検討 現地へのスタディツアーに係る検討部会が発足 学校を拠点に、国際協力啓蒙を行うことを検討 里親—里子新聞について、編集部が発足を説明	P 7—P 11 (P 7) (P 7—P 8) (P 8—P 9) (P 9—P 10) P 10—P 11) (P 11)

巻頭の呼びかけ

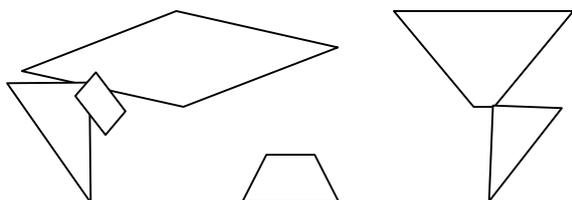
会長 小西菊文

皆様、今年も、インドネシアおよびスリランカの教育里子たちへの支援をすることができました。厚く感謝を申し上げます。今年度のあたらしい里親獲得目標に、まだ81名足りません。なぜ国際協力への参加を増やしたいのか、もう一度考えてみましょう。

最近行った日本の学校訪問

先日、埼玉の世話役代表さんからのご紹介で、小学校6年生の『総合学習』の講師に行っていました。とても楽しい1時間でした。その様子をお話ししようと思います。

初めに世界地図を描きました。



とんでもない略図ですが、子どもたちに「この国がないと思ったら、言ってごらん？」と問いかけると、だんだん詳しい世界地図になってきます。小さな国々のことも、子どもたちが意外に知っているのが驚かされます。

でも、「日本がないよ」が出ない

多くの国の子どもたちがいるところでこのような遊びをするとき、みんな競って自分の国を描こうとします。ところが日本の子どもからは、なかなか「日本がないよ」の声が出ないのです。なぜでしょう？ と問いかけました。伝えたいと考えないことが理由です。

授業で日本文化を習うけれど…

その学校では、5年生のときに日本文化の

勉強をします。それは素晴らしいことです。でも、自分でできるようになろうと強く思う子どもはいないようでした。

『さてそこで』の国際交流

スリランカの子どもたちが、自分の国の生活を知ってもらおうと日本語で劇をしてみた。1999年の来日公演ビデオを見てもらい、生活劇の中で気づいたことを、どんどん言わせましたところ、参観の先生たちが驚くほど、次々と出てきました。110円のお金がないので遠足に行けずに学校を休んでしまうかもしれない、親の手伝いをするので学校をやめてしまうかもしれない、毎日おかゆばかり食べていたら栄養失調になってしまう…。

気づくチャンス子どもに！ それこそが大人の役割！

われわれ親や祖父母の年代の途上国の人々への態度は、理論はともかく、心の底では、「あげる」「させる」「まだまだだ」の域を出ていないかもしれないのです。しかし、いまの子どもたち、とくに中学生から下の子どもたちは、気づきさえすれば、「知りあおう」「分けあおう」「一緒にやろう」「伝えたい」となる素晴らしい芽をもっています。

そしてそれは、日本にある良いものを意識し活かそうとする気持ちにつながります。

私は、それこそが活力ある日本人の原動力と考えますし、この芽を大きく育てるのは、大人たちの役割と思います。

C.P.I.の同志をふやしましょう。
これからの10年間で大事です！

教育里子との交流のしかたを改善していきます



お手紙を紹介します

拝啓。C.P.I.の皆様には、いつもお世話になりましてありがとうございます。

里子に手紙を書かなくちゃと思いながら、文が浮かばないと筆不精のため、なかなか書けません。里子の写真をながめつつ、ごめんなさいね、頑張っ
てねと詫びていました。だんだん「こんな会員ではいけないんじゃないか」という気になり、それが重荷になってきて「辞めようかなあ」という気持ちにもなっていました。

しかし、このたびの会報で、里親—里子新聞が発行されるという記事を読みまして、ああ良かったと思いました。気持ちはいちどに晴れました。

里子さんからはよく手紙をくださり、日本の私たちを慕ってくれる気持ちが丁寧な字を見ればわかります。本当にありがたいことだと思います。私が、里親さんたちのひとりとして、受持ちの里子さんの心の糧であるのだから、なにか書いてあげようと思えども、毎年「今年は忙しさも半減するだろう」と思いきや逆に忙しくなるばかりのこの頃です。書かない理由にはなりませんけど…。

これからは、気持ちが安心できます。

編集委員のみなさまよろしく申し上げます。

(新潟 I さん)

里親—里子新聞編集部会から

12月7日に初の編集会議を行いました。1月には、まずスリランカ向けにシンハラ語で出します。東京3名・千葉1名・埼玉1名・神奈川1名・静岡1名の部会委員が記事集め・校正・編集を行い、JICA青年海外協力隊OBならびに在日スリランカおよびインドネシアの方々が翻訳で協力して下さいます。(山川)

もう一通のお手紙をご紹介します

スタディツアー一部会の発足にあたり

以下にご紹介するのは、現地での里子交流が上手くいった例ですが、現地訪問された方々がこのような気持ちでお帰りいただけるよう、このたびスタディツアー一部会が発足しました。(会長・小西)

→ P9の評議員会検討報告に詳細

8月のスタディツアーから時が移り、秋の虫の声が聞こえる候となりました。ツアーのときには、卒業した里子にも会うことができました。

今年のはじめ、『テストに失敗して就職した』とのみご連絡をいただき、学校の先生を希望していたのに、どんなところに就職したのかと気になって、気になって、心配しておりました。

会ってみましたら、小さなアパートに寝泊りしながらキャンディに自分で英語の塾を開き、生徒は60人もいるそうで、10人ずつ日を分けて教えて、「その収入で自分も毎日英語の学校に2年間通い試験に合格して高校の先生になる」と言いました。月一度、満月のお祭りの日だけ休暇をとるそうで、私の行った日がちょうど満月の日で喜んでました。

その家族は一回目の訪問のときは土間が土で、食器もひとりにひとつの皿とコップだけで、可哀想で涙がこぼれました。二回目の訪問のときは、テーブルと粗末な椅子があり、土間にビニールが敷いてあり、椰子のジュースをだしてくれました。三回目は、床にフロアリングが貼られ、靴を脱いで上がりました。部屋もきれいになり、サイドボードとちゃんとした食器が揃い、窓にガラスがはいりカーテンもついていました。本棚には本が並び、来客用のソファもあって、私はほんとうに安心しました。里子のがんばりのおかげだそうです。

こうやって、私のしたことの結果が見られて、この喜び、この手ごたえ、心に錦を飾った気持ちは何にも代え難く、里親になってよかったと、みなさまに感謝しております。(後略・埼玉 S さん)

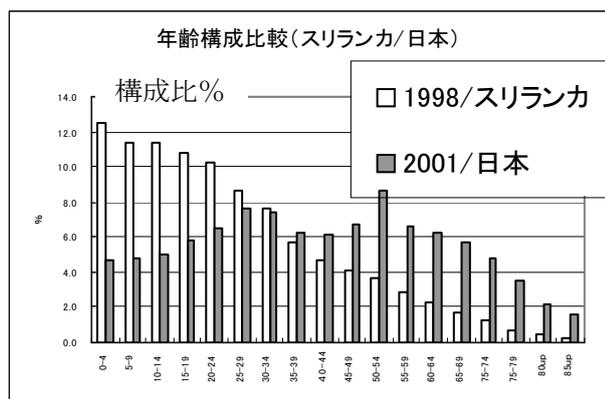
スリランカの国勢調査等からみた社会事情

(事務局次長 山川洋一)

C.P.I.の初代理事のおひとりで現顧問・日下基金理事長の日下大器さんが、スリランカの国勢調査を和訳してホームページに出しておられる。

⇒ <http://www.srilankakey.org/>

その統計から、興味あるデータをグラフにした。



30歳で結婚するとすると、最も教育費のかかる思春期の子どもたち(12歳から22歳)の親は、42歳～52歳ということになる。

スリランカでは、ひとつの家族の教育費がかかる子どもたちの数は、スリランカでは平均3人弱、日本では平均1.3人。つまり、スリランカでは人口がますます増えつつあり、経済圧迫の要因となっているということである。日本の場合は、いまのところ高齢者とのバランスをぎりぎり保っているため、壮年者の経済力を子どもの教育に向けることができているが、今後は高齢者の収入確保を真剣に考えなければ、難しい事態を招くだろう。スリランカ政府は一所懸命に少子化を勧めているが、将来の高齢化社会という課題の芽が見える。

また、29%の30歳～54歳の人たちが、55%に及ぶ0歳～24歳以下の子どもたちの面倒をみていかなければならないスリランカの現実、教育を社会負担としているスリランカの教育制度を根底から揺るがしている、といえるだろう。

人々からの聞き取り調査によると…

次に、民衆の生活を日用品の価格を調査した。

	レート:Rs/円=0.75	スリランカ		日本市場
		Rs	円換算	円
米(一般)	1Kg	35	47	400
米(高級)	1Kg	60	80	600
小麦粉	1Kg	25	33	170
とまと	100g	8	11	70
たまねぎ	1kg	35	47	160
鶏卵	10個	55	73	180
鶏肉	100g	20	27	130
魚切身(大)	1切	50	67	300
ミネラル水	500cc	25	33	120
コーラ	500cc	25	33	130
ビール	630cc(大)	60	80	350
ガソリン	1リットル	50	67	96
日刊新聞	月	450	599	3,900
バス	(約15km)	9	12	200

都市部の一般家庭の出費(夫婦+子供2人 8,10歳)

項目	スリランカ	日本	日本市場
食費	5,000	6,650	90,000
住宅費	3,000	3,990	90,000
電気代	1,000	1,330	8,000
水道代	300	399	3,000
電話	750	998	9,000
衣料	1,000	1,330	5,000
医療	500	665	3,000
交通費	500	665	4,000
教養費(新聞/TV)	500	665	10,000
教育費(学校・塾)	1,500	1,995	15,000
計	14,050	18,687	237,000
幼稚園学費(公立/年)	0	0	155,000
幼稚園学費(私立/年)	300	399	340,000

ちなみに、高卒初任給は6,000Rs. ホテルマネージャークラスの収入は30,000Rs. が標準である。

インドネシア里子との対話会から

Q: PPKIJ-C.P.I.の奨学システムの特徴が知りたい（ボゴールの集会での質問）

A: C.P.I.と M.SAID 財団がPPKIJをつくったのは金銭としての奨学だけを目指すためではない。貧困にあっても社会リーダーを目指す若者のネットワークを、日本とインドネシアで力をあわせて築こうということを目指している。

インドネシアの各地の異なる民族の若者が、同じPPKIJに集うものとして活動を共有し情報を交換しあい、向上していくことを望んでいる。

教育里親－教育里子というのは、日本人とインドネシア人の間のネットワークも育ててほしいと考えて、奨学金の支援も含めた制度をつくった。

そのような目標から考えても、この数年インドネシアの里子ネットワーク活動が停滞しているのは残念なことだ。来年は PPKIJ の精神を取り戻す活動をしてもらいたい。そのための費用は、CPI 教育開発基金から出す。日本人も参加してほしいと思う。

いくつかのチームに分かれた活動を希望する。

1. PPKIJ内の、学生同士、学生と地域リーダーのコミュニケーションのとり方を考える
 2. インドネシアと日本とのコミュニケーションのとり方を考える
 3. 共通して動くことができる社会活動を討議する
- これらの分科会に参画できる者を、高校 3 年生以上の中から選抜して、チアンジュールの研修センターで合宿しよう。Alumini にもよびかけたい。時期として、高校の卒業試験後がよい。



Q: 日本語の先生のためのコースが欲しい。（バンドンの集会での質問）

A: 日本語教師同士で e-mail 討議をして、ジャカルタで交渉チームを作り、国際交流基金で特別コースを作っていただくようにするのがいいだろう。研修者は全国から集まるので、ジャカルタに宿泊場所を設置する。PPKIJ 研修所が最もよいと思う。



Q: 私立大学に入った者の奨学を考慮することができるか（ジョクジャカルタの集会で）

A: ジョクジャカルタは観光地でもあり、学校も多く、比較的アルバイトの機会が多い。アイデアを集めて、効果的な収入プログラムを考えてみたらどうか？いまのインドネシアの状況は、大学でアカデミックな勉強をしている学生よりも、実際社会でもまれながら苦勞して勉強を続けた者たちには、より将来性を感じている。



（上の写真）働きながら大学生活を成功させている例として、Sri Wardaningsh 大学に通っている女子学生が、自分のやり方を話した。勉強しながら服の修理で稼いでいる。他に、出張パンク修理で学費を稼いでいる例が発表された。

Q: スマランの卒業生が参加できる、市との協働プロジェクトについて、もっと知りたい。(スマランの集会での質問)

A: 小西は、10月14日10:30-11:40 世界銀行 Jakarta 事務所の Mr.Ilham および Ms.maria と協議し、翌15日に彼らがスマランの調査に来られる予定だ。スマラン市との合同計画に対する視察があるため。

スマラン市と PPKIJ スマランのあなた方は、この水害を減らし貧しい民衆の生活をよくするための果樹園プロジェクトに夢を託している。私は君たちの意欲に動かされて、市長さんや専門家、世界銀行に一所懸命話してきた。

それがようやく実ろうとしているわけだ。

いまや、市と PPKIJ との合同委員会は、プロジェクトのための土地を確保し、民衆組織に400人のリーダーをつくり、必要な知識と技術を教える体制をつかった。世界銀行の誰が視察に来られても、きっと喜んでくれるはずだ。

あなた方は民衆リーダーたちがその仕事を上手くできるように、中心になってがんばってほしい。このプロジェクトは、PPKIJ 教育里子卒業生たちの活躍の場の将来を企画する大きな試金石となるだろう。未来を民衆のために切り開いていこう。



スマラン市長庁舎の講演会場で行われた認証式



会員から

Q: インドネシアの教育里子たちも、卒業生が4000名にもなっているが、就職が大変だと聞いています。1999年に職業開発センターを草の根無償を得てつくり、教育開発基金を設けたはずですが、どんなことをしていますでしょうか？(東京：黒田)

A: 職業開発センターの設立のときには、土地取得のために PPKIJ にご寄付を戴き、ありがとうございました。これまでは村々で小規模製造業を始められるように、例えばパン製造技術・おもちゃの組み立て技術などを教え、英語やコンピューターの能力訓練もしてきました。これからは、政府で充実すべき職業を JICA など援助機関と協働して開発し、就職の巾を広げる活動に協力していきたいと思います(例:消防士)。既存の職業だけで考えていたのでは、狭い範囲での訓練しかできませんから。

また、スマランのように、地方政府との協働プロジェクトを立ち上げて、里子卒業生が、民衆の生活向上のリーダー職につくようなプログラムにも協力しています。ちなみにスマランプロジェクトは、世界銀行から支援を受ける運びとなっています。



マランとジュンバールの合同認証式にて

2002年度第2回評議員会(11月9日)検討録

平成14年11月9日(土) 13:00~17:40 国立オリンピック記念青少年総合センターで、評議員13名 理事・監事 9名、SNECCからチャンダシリ事務局長を招いて、評議員会をおこないました。

来年の活動に向けて、会員の皆様が現地の里子たちとの交流・協力をどのように行っていくか、法人としてどのように動き出すかを検討する会議でした。

評議員出席15名に委任状を含め定足数に達し、議事進行を会長が行うことを一同賛成し議事に入りました。検討内容は に記してあります。

検討課題 1. 地域会代表の、奨学生認証式への参加

解説(会長から):

法人となって、本部理事・監事・評議員の皆さんは当会役員となられたわけだが、当会にとって最も大切な奨学生認証を日本側法人役員として式典出席を分担していただけるようにしていきたい。

いまのところ参加戴く方にはボランティア負担をお願いします。

しかし、教育支援事業は当会の重要な継続プロジェクトであるから、役員の出担出席にかかる経費は、追々には、会として内部或いは外部からの視察補助金で賄えるようにしていきたいものだ。

評議員会の結論:

スリランカについての検討結果は以下のとおり。
とりあえず訪問できそうな方は手を挙げてみてはということになり、藤庭達雄副会長・山川洋一理事・推名陽子理事・小須田和良神奈川地域会代表・鈴木康夫千葉地域会代表が、小西会長とともに、認証式出席の可能性を提出。日程は現地政府出席者の確定の後、調整することになった。

インドネシアについては、まだ月日が相当にあるため、改めて検討することになった。

検討課題 2. SNECCからの2件の要請

解説(会長から):

会報56号『事務局だより』で、理事会での検討経過を全会員に解説し周知をお願いした件の検討。

本件はC.P.I.理事会に付議され、SNECC理事会に提案を出したが SNECC との意見に隔たりがある。本日はSNECCのチャンダシリ事務局長がご出席されている。現地側の考えも聞きご検討願いたい。

① 新しく得た SNECC 敷地に予定している植物園および理科観察施設への支援の件

評議員会の結論:

1月に SNECC からの再提案をして戴き、それを受けて理事会で協議してもらいたい。(1月は、外務省等の助成金を申請する期限)

検討の様子

SNECC 側の説明:

4エーカーの土地を、政府からもらい、プロジェクト開始式を8月に行った。教育省のプログラムを SNECC が代理するというもの。
C.P.I. 理事会の提案は、『薬草園をつくるプロセスを学生の手で。材料費の補助は、教育開発基金の利息で間に合うなら予算を出して欲しい』というものだが、薬草園だけではない。観察室・実験室・視聴覚室のある建物が必要だ。建設工事費5年間で750万円とみている。少しずつ建てていく予定だ。

門倉評議員の質問:

少しずつとはどういうことか?

山川理事の質問:

前の提案よりも拡大されたプロジェクトになっている。どういうことか?

SNECC 側の説明:

お金を得て、その額の分を建てて行くのがスリランカ方式。薬草園だけでは理科観察として不十分ではないか! 必要十分なことをしたい。

② 敷地内に建設中の施設への支援の件。

評議員会の結論：

SNECC 理事会で再度きちんと協議してもらおう。

検討の様子

SNECC 側の説明：

C.P.I. 理事会は、日本の寄付者が施設使用を優先することに反対のようだが、すでに岡山の寄付者・大阪の寄付者により 300 万円が 200 万円ほど集まったので建設を開始し、SNECC 理事会は（寄付集めに対する効果も考え）「施設使用は日本人寄付者優先」と決めてしまった。運営は SNECC が決めることだから、任せてほしい。

中村さんの発言：

「使途はいろいろあるから資金を出してくれ、使う優先度は SNECC で決める」では、C.P.I. としては納得していただいて資金を集めることは難しいだろう。そもそもはこういうことで使うのですよと使途の柱をきちんと立てなければ駄目でしょう。日本側の寄付者が宿泊等で利用できる条件は、別途に明らかにすればいい。

SNECC 側の要望：

小西さんは 300 万円集めてくれると言った。

宮原理事：

少しおかしい。会長は、地域センター指導者・卒業里子のリーダーとくに女性のリーダーに優先を与えるならば、資金を集めることができると言ったはず。日本人寄付者に優先させるのは変えられないとの発言で、会長は資金を集めることはできないと言われたのを目撃している。

SNECC 側：

日本人がお望みなら泊まれるということ。

宮原理事：

誤った情報で検討することはよくない。

SNECC 側：

スリランカで小西さんが、「SNECC の地方活動家と日本の寄付者が同時期に宿泊利用したいとやってきたら、どちらを優先するのか？」と質問したので、「日本の寄付者を優先する」と答えて決裂したのは確か。SNECC 理事会には、本日の会議での皆さんのご意見を話すつもりだ。

検討課題 3. 地域会を主体とした来期のスリランカでの交流を検討

解説（会長から）：

C.P.I. 地域会による『日本から伝える活動』を活発にしたい。『もっと知りたい』『もっと伝えたい』ということから国際協力が始まるのだから、新しい契機にできたらと考える。

評議員会の結論：

「日本祭り」という展示会形式の催事は考えない。

地域会が現地とどのような交流をできるか、2003 年 1 月末までに各地で検討して、C.P.I. 理事会にレポートを出すこととする。

検討の様子

小須田評議員の発言：

今年の『日本祭り』にスピーチコンテスト審査員などで参加したが、大変な規模の展示会・コンテストで短期間によくぞ準備されたと感心した。日本側の主力は大阪の日本スリランカ文化協会（南西部アイピティアの里子のみ受け持っている）だったが、地域的なまとまりと資金・拠出物品面での相当ながんばりを見せていただいた。SNECC 支援の 90% を C.P.I. が支えているとはいるが、あのようなイベントにエネルギーを集中させることは難しいだろう。我々は会員が広域であるし、日本国内はともかく外国での催事ではとりまとめるのは至難の業だ。

C.P.I. からは薄井関連協議長が奮闘されて展示物を送り、C.P.I. 理事会は平和メッセージのコーナーをつくる協力をした。私たちができることはきちんとやったと思う。しかし、準備期間が短かったこともあるが、今回我々は大規模な展示物収集の約束をしなくてよかったという感想をもった。

会場の大勢の意見：

来年のことだが、展示会を想定させる『日本祭りを行う』との題目を変えたほうがいい。今年と同様、あるいはそれ以上の期待をされても困るし SNECC 側も対応できないだろう。

続・検討の様子

会長の発言：

皆さんのご意見のとおりだろう。

牟田理事：

それにしても、私の個人的意見としては、文化交流はC.P.I.の活動として、良いことと思う。

荒木評議員の提案：

日本の子供を連れて行って、他の社会を知るようにするのも大事。そのようなことをC.P.I.が手伝えるようになるのもいい。なにができそうか、各地で考えたらどうか。

検討課題 4 会員の活動を本部・地域会が 応援することについて

解説その1(会長から)

スタディツアーに係る検討部会を発足させたい

C.P.I.会員の現地研修事業の課題として、目的・日程・訪問地域の現地と調整、訪問里親が受持ち里子以外の里子たちと交流したときの費用に係ること、現地案内兼通訳者の養成に係ること等につき再検討を行う時期に来ている。

評議員会の結論：

会長からのこの課題についての総括は、スタディツアー(会員研修)は、これまで、よいことも沢山あったが、参加者の気持ちと現地行動との間で齟齬の数々あり、その点は誠に遺憾ということだ。

スタディツアー部会を本部におき、過去のスリランカ、およびインドネシアへのスタディツアーの経験での、活かしたい経験と改善したいことをよく整理し、目標の再検討を含め建設的に検討して戴きたい。

部会の委員は、門倉礼子評議員(立候補)、推名陽子理事(交流委員長・会長依頼)、中浜良二評議員代理(会長依頼)、山川洋一理事(会長依頼)、笹島速評議員(懇談会にて会長に相談して)の5氏に依頼する。

検討の様子

会長より問題提起：

昔、私がすべてのスタディツアーに付き添っていたときは、各地で里子たちを集めて話したり歌っ

たり、踊りを見せてもらったり、日本の紙芝居をしたり、子どもたちも楽しみにしてくれていた。インドネシアでは里親とは別に青年交流団を3年連続派遣しあるいは受け入れて活発だった。

いまはどうか？

スリランカでは(地域会が主宰する交流団を除くと)里親交流団と里子全体が交流することはなくなってきている。各自の里子に会うほかは、観光の方が多いうようにみえる。

インドネシアでは青年間交流は途絶えているし、里親交流団もこの数年は千葉地域会の交流団のみ行っていて、本部主宰への参加者がいない状態だった。その結果、相手側には、千葉の交流団がこの数年行ってきたやり方が浸透していた＝<里親交流団と地域の里子たちが交流するのは当然。また、比較的柔軟な予定の中でドゥニシ的な文化(困ったことも含めて)を知ってもらう。ホテルを最終的に決めるのは現地での日本側なので予約金を事前に支払ってはいけない。里子との交流を重視する。ETC.>

本年久しぶりに成立した本部主宰のインドネシア・スタディツアーにおいて、C.P.I.本部の事前根回しと現地地域センターとの行き違いがおき参加者が疲労する結果を招いた。車の故障・ホテルの二重予約・日程についてのPPKIJジャカルタ本部との間の連絡ミスが主たる原因だが、根底には交流団に係るルールが現地側で変化していることであつたと考える。申し訳ないことだつたと同時に、残念なことでもあつた。

これら両国での状況に鑑みて、C.P.I.スタディツアーと名うった交流団のルールと目標を改めて立て直す必要を感じる。そのための「スタディツアー部会」を発足させたいと思う。

私は地域会が目標をもって、全体のルールを尊重して動いてくれるのが最もいいと思うが、地域会のないところもあるし、本部主宰は相変わらず必要だと思っている。

私は、スタディツアー部会においては、過去の経験に基づいてのアドバイザー役に徹していくつもりでいる。

Q&A

門倉評議員から：

上記問題に絡んで、本年夏に行われたインドネシア・スタディツアーの「苦い経験」について報告あり。以下、Q&A。

Q: C.P.IとPPKIJとの関係は？

A: C. P. I. と KI. Mohammad Said 基金会とで設立したのが PPKIJ (インドネシア日本教育文化センター)。協力団体として位置づけている。

Q: 今回、到着初日のジャカルタ空港に来ているはずの出迎えの人が一時間も遅れ、宿泊ホテルを捜すにも手間取った。なぜか？

A: 出迎えの PPKIJ 主事の母親が急に危篤になり空港に来れず事務職員がかなり早めに代理で出発したが、空港で上手く出会い損ねたと聞いている。交流団には主事の携帯電話番号をお教えしておいたが、これまた上手く連絡も出来なかったのが悔やまれる。

Q: 案内の人の判断ミスや聞き間違えで日程が変わったりホテル予約が消えていたりした。

A: 案内をジャジャ先生 (現在、教育大学の学部長) さんがしてくださっていた頃は完璧だった。日本人のメンタリティ理解が抜群だったからだと思う。後継者育成が必要。

(今回の案内役は、全国教育里子リーダーのベニ君が行った。緊急事態の対処は抜群だし、他のインドネシア人に対するリーダーシップ能力も高く、いつも明るい性格なので彼を案内人とした。ただ、経験不足とジャカルタとの連絡行き違いが後日判明)

Q: 交流団は C.P.I本部に特別会費として一万円支払っているが、明細はないのか？

A: 交流団にかかる人件費や通信費などをほかの会員に負担してもらうのはどうか、ということ、1992 年から特別会費として戴いている。個々の明細は出し得ないので、決算では収入の一部に組み入れている。

Q: この件も含めてスタディツアー一部会で検討することになるのか？

A: そのようにお願いしたい。

解説その2。(会長から)

学校を拠点に、国際協力啓蒙を行いたい

「知りたい」「伝えたい」から相手の状況を知り、何かしたいと思うことが国際協力のきっかけ。そうであれば、子どもたち同士にその芽を育てたい。日本の学校と現地の学校との交流により、そのような活動の実現を図りたい。

評議員会の結論：

本日の検討を踏まえてチャレンジをしよう。

本部は、地域会と連携してバックアップ願いたい。

検討の様子

山川理事の発言：

何のためにやるのか、誰と誰が交流するのか、よく検討するべきだ。

会長から説明：

子どもたち同士がお互いのことを考えられるようになることは、いいことだと思う。こうした活動は、会員一人ひとりの知己を通して少しずついいから広げていくのが良い方法だと考える。地域会および本部としては、そのような活動をバックアップする立場をとりたい。現地側の学校の調査・選考、現地で支給している奨学品セット・絵・紙芝居といった説明パックを用意する、講師を頼まれたら出かけていくなどが考えられる。

鈴木評議員の提案：

千葉の校長会の知り合いに話していったところ、3校ほど積極的な感触であった。熱心な教師がいると、この手のことは進められる。ただ、仲人役としては、現地側についてある程度の調査を行って、気持ちよく継続していけるように努めることが大切だろう。

荒木評議員の提案：

小中学校に『国際交流クラブ』あるいは『国際親善クラブ』があるから、そういうところを取り掛かりにして、ゆくゆくは子どもたちが現地に交流に行くことも視野に入れたことをしていったらどうか。

会長の意見：

日本の地方自治体は、青少年交流に補助金を出す傾向にある。C.P.I.で学校交流をお手伝いしていき、自治体から補助金をとって、荒木さんの言われるようなことを行っていくことが考えられると思う。

小須田評議員の意見：

横浜国際交流協会は、確かにその傾向にある。

SNECCから：

スリランカから交流を希望している学校リストを出したが…。

会長から提案：

この会議で、まずはリストの出ているスリランカとの学校交流にチャレンジしてみようという地域に手をあげてもらえないだろうか？

そうしないと前に進まない。

鈴木評議員：

日本の学校に概要を紹介するために、私が一月に訪問するつもりだ。

各地域会からのコミットメント：

千葉＝鈴木評議員の知己3校ほど。

静岡西・愛知＝世話役のおひとりが意欲的

埼玉 A＝会長から＝本日は来られていないが滝口評議員から可能と聞いている。

埼玉 C＝世話役のひとりが意欲的。

神奈川・福岡・北海道＝可能だと思うとのこと。

関西＝会長から＝紙芝居交流を既に行った岸和田市山滝中学校から進めたい。

山川理事：

現在でも学校ぐるみ教育里親として続けてくださっている学校にも呼びかけたい。

解説その3 (会長から)

里親—里子新聞の発行について編集の件

山川理事から、編集委員・翻訳者を何とか確保できたので、スリランカへの里親新聞を手始めに1月に現地で里子に配布する目途で開始したいとの発表がなされた。ここで議場の退出時間となったため、本検討は懇談会で意見が交わされた。

最後にスリランカ SNECC を代表して、チャングシリ事務局長から挨拶があった。

私たちにとって、C.P.I.があつてここまで活動が充実してきたことを感謝している。

2003 年度からスリランカ教育里子についてのルールを改訂した。地域センターでの里子調査についても、卒業後の報告をもっと充実させたい。

私および SNECC 理事会と小西さんは、今日も皆さんに目の前で知っていただいたように、激しい議論を行いながら方針を考え、実行してきた。小西会長との意見の違いは、スリランカと日本の歴史・システム・考え方など、様々な文化の違いでもある。

だから、議論になるのは当然で、根底の信頼関係があれば、議論の激しさは問題ではない。

私と小西さんは、なにがあつても信頼しあっている。ただ、私が小西さんの意見をもっともだと思つても、SNECC 理事会を説得できないこともある。その逆もあるだろう。それはやむを得ないことだ。プログラムによっては、議論の結果、C.P.I.理事会と SNECC 理事会の考えが調整できずに流れてしまうものもあるし、SNECC 独自でやってしまうときもある。小西さんは、SNECC が「プログラムによっては他からの支援なしに独自にやれる」ところまで成長したことを喜んでくれている。そのことは、重ねて感謝したい。C.P.I.Japan と SNECC は、これからもお互いにパートナーとして、今まで以上に協力して子どもたちのためにやっていきたいと思うので、よろしくお願いします。

